

## 実習生の意識調査から見た教育実習の現状と課題

藤本登（長崎大学教育学部）

松元浩一・山田真子・牧野一穂・河合史菜・藤井佑介

### 1. はじめに

現在の国立大学の教員養成系学部の実習については、国立教員養成大学・学部における教育実習制度の調査研究<sup>1)</sup>など、学部教育の改善の方策を探る一環として数多く行われている。また、学部教育と実習の関連性を探る研究<sup>2)</sup>も多数ある。そのような流れの中で、教員の資質能力向上に関する中央教育審議会の議論も活発化しており、その答申にも実習改革として教育実習時の能力確保、教育実習の指導と評価の一体化、教育委員会等との連携と公立学校での職場体験実習の導入等が求められている<sup>3)~5)</sup>。一方で、本学部生の近年の教員採用受験率は、70%未満と高くなく、入学時から教員志望率が徐々に低下する傾向が指摘されている。この状況は、教育現場の状況と将来性の把握・理解と就職環境の好転が主な理由であるが、学部教育や教育実習などを通して、教職の魅力や意義、そして実務能力に対する自信を持っていない学生がかなりの割合で存在すること（アンケート調査では自信を持っている学生は3割程度）が大きな要因として挙げられる。

本研究は、本学部教員養成課程の3年生を対象に実施したアンケート調査をもとに、学部教育と教育実習の関係性、教育実習と教員志望の関係性、教育実習に関する支援制度の在り方などを分析することで、学部教育と教育実習との接続に関する問題点を明らかにし、学部教員養成教育の在り方を再構築するための手がかりを得ようとする試みの一環である。

### 2. 対象学生とアンケート調査方法

実習に関するアンケート調査と教育実習中の教室開放に関する調査を、長崎大学教育学部の3年次の教育実習生を対象に行った。実施時期は、特別支援学校の主免実習が2~3月（未実施）、その他の校種が9月、特別支援学校の副免実習が6~7月と10月、その他の校種が5月である。アンケート調査は、実習初日のオリエンテーション前と実習最終日に、教育実習中の教室開放に関する調査は、

表 1. 実習生数とアンケート回答者数（回答者数、有効回答数）

免許種（コース）	主免実習	教室利用（主免）	副免実習
幼稚園	32（32、31）	257（115、89）	26（26、22）
小学校	137（136、132）		33（33、19）
中学校	73（72、46）		70（68、68）
特別支援学校	15（－）		63（63、59）

表2. アンケート調査の内容

(a) 主免実習・副免実習

No.	設問	主免		副免	
		事前	事後	事前	事後
1	実習先附属学校園（中学校は教科名）は次のどれかですか。	○		○	
2	実習校園で、あなたが配属される学年はどの学年ですか。	○		○	
3	実習期間中にあなたが行う予定の授業・保育の回数は何回ですか。	○		○	
4	あなたが行う授業の教科目は何ですか。（複数回答）	○		○	
5	現時点で、あなたは教職に就くことを望んでいますか。理由も記述してください。	○	○	○	○
6	次の各事項について、あなたは教育実習前どの程度準備できていますか。				
①	心身の準備（メンタル、体調など）	○	○	○	○
②	授業の準備（指導案）	○	○	○	○
③	授業の準備（教材）	○	○	○	○
④	子ども（幼児、児童、生徒）に積極的にかわる		○		
⑤	謙虚な態度で担当教員の指導や他の実習生の意見を聞く		○		
⑥	子どもの言動を理解し共感する		○		
⑦	担当教員や実習生の意図を共有して指導（支援）にあたる		○		
⑧	日録での客観的記録作成と今後の指導（支援）方法の記述をする		○		
⑨	授業（保育）の目標（ねらい）を明確にし指導（支援）の手だてを具体的に示す		○		
⑩	子どもの実態やねらいに応じて、指導計画を立てたり学習形態を工夫する		○		
⑪	授業（保育）や反省会に視点をもって参加し、より良い授業をめざして意見を述べる		○		
⑫	授業（保育）の山場をおさえ、思考（発想）を促す発問（ことばかけ）や助言をする		○		
⑬	子どもの実態や活動に応じて適切な時間配分をする		○		
⑭	教師として個々の子どもに応じた適切な話し方や指名のし方を身につける		○		
⑮	丁寧に分かりやすい板書（掲示）をする		○		
⑯	学級集団の指導（クラス集団づくり）に計画的に取り組む		○		
⑰	授業（保育）での反省点を生かし、より良い授業（保育）実践づくりをする		○		
⑱	研究報告の主題を設定し、課題追究に必要な資料を収集する		○		
⑲	社会人としてのマナー（服装、言動、時間管理、報・連・相）を守る		○		
7	実習期間中の附属学校園と大学の施設利用についての利用状況を教えてください。				
①	附属学校園の利用時間帯は何時までですか		○		
②	平日の大学の教室利用はどこで、何時まで行っていますか		○		
③	休日の授業準備や打合せはどこで、何時から何時まで行っていますか		○		
8	実習で必要となる教員としての基礎・基本的知識・技能が、どの程度あると思いますか。	○	○	○	○
9	教育実習を体験して、教員としての自分の指導力をどのように感じましたか。		○		○
10	今回の教育実習体験で、もっと理解を深め（探究）したいと思ったことは何かありましたか。		○		○
11	附属学校園での教育実習に期待することを具体的に書いてください。	○	○	○	○
12	教員としての資質・能力や実践力の向上を考えた場合、現行の学部授業（事前指導含む）の内容について、見直す必要があると思いますか。	○	○	○	○
13	あなたは大学教員や教職アドバイザー及び附属教員へ、事前に相談を考えましたか。	○	○	○	○

(b) 主免実習中の教室利用(アンケート調査日:9月16日(土)、18日(祝・月)、24日(日))

No.	設問
1	今回、教室を利用する目的は何ですか。
2	今回、教室を利用して目的は達成できましたか。
3	実習を行って、教育実習中の学習支援環境（附属学校・園）について、当てはまる項目を選んで理由を書いてください。
4	実習を行って、教育実習中の学習支援環境（大学）について、当てはまる項目を選んで理由を書いてください。
5	問(4)で、「あまりない」「ない」と回答した方で、自分でできる対応策があれば書いてください。
6	問(4)で、「あまりない」「ない」と回答した方で、大学にしてほしい対応策を2つ以内で書いてください。

主免実習中の休日教室開放時間帯に実施した。被験者数、回答者数、有効回答数を表 1 に示す。また、アンケート調査の調査内容を表 2 に示す。実習に関するアンケート回答時間は 10 分から 15 分である。教室利用に関するアンケートは、利用時間内に、回答を依頼し、回収箱に提出してもらった。表 2 (a) の問 1～5 は選択項目を設定し、問 5、6、8、9 と 12 は 4 件法 (1 がネガティブ・低い表現、4 がポジティブ・高い表現) とし、問 10 は 2 件法 (1 が「ある」、2 が「ない」) とし、問 13 は、3 件法 (1 は「実際に相談にのってもらった」、2 は「相談にのってもらいたかったが、できなかった」、3 は「必要がなかったため、相談していない」) とした。表 2 (b) の問 1 は選択項目 (1 が「模擬授業」、2 が「教材づくり」、3 が「打ち合わせ」、4 が「みんなが来るから」、5 が「その他」) とし、問 2～4 が 4 件法 (1 がネガティブ・低い表現、4 がポジティブ・高い表現) とし、問 5 と 6 は自由記述とした。なお、調査時の本学部の実習時期は、特別支援学校の主免実習が 2～3 月とそれ以外の校種が 9 月、特別支援学校の副免実習が 6～7 月と 10 月の 2 グループとそれ以外の校種が 5 月である。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 授業担当状況と施設利用状況

表 3 に主免実習時の担当科目を示す。小学校は延べ回数であり、中学校は専攻教科を示している。また、実習時間は幼稚園が 1 日の保育と半日のショート保育、小学校が平均 3 回の授業、中学校が 3～8 回 (平均 5.8 回) の授業時数であった。問 7 より、主な実習時間は、幼稚園が 8～18 時まで、小・中学校が 8～20 時までであった。表 4 に平日と休日の大学の利用場所を示す。幼稚園はコース専用教室である「親子広場」の利用が多く、また、教材づくり等を個人で行うことが多いため、他の校種に比べ「利用なし」、「研究室関連」、「リフレッシュ室」、「図書館」を分散して使用する傾向が見られる。使用時間帯は平日が 18～24 時で 20 時と 23 時に二度ピークがある。休日は 10～16 時に利用し始め、13～20 時に利用が終わる。これに対し、小学校は、コースで使用できる部屋が 1 教室しかないため、「教室」と「図書館」の利用割合が高い。平日の使用時間帯は 21～24 時で 22 時と 24 時に二度ピークがある。休日は 8～14 時に利用し始め、13～24

表 3. 担当科目

	小学校	中学校
国語	123	8
社会	22	6
算数(数学)	116	11
理科	20	11
英語	5	8
保健体育	21	5
技術		5
音楽	10	5
図工(美術)	7	6
家庭	8	5
道徳	50	
特別活動	1	
生活	17	

表 4. 平日と休日の大学の施設利用状況

	幼稚園		小学校		中学校	
	平日	休日	平日	休日	平日	休日
利用なし	9	4	2		7	3
親子広場	17	26				
教室	1		124	102	1	1
音楽室・PC室	1		5		5	
研究室関連	6	5			36	34
リフレッシュ室	3		1		8	1
音楽棟						5
図書館	4	5		47		7
全学施設		1				
家		2				

時に利用が終わる。そして、中学校は各専攻で研究室、ゼミ室や演習室を保有しているため、「研究室関連」の利用割合が高い。使用時間帯は平日が18～24時で22時にピークがある。休日は10時から17時に利用し始め、12～22時に利用が終わる。

教室開放の実施とその時に実施したアンケート調査結果から、教室開放に関しては、実習期間中の中日の日曜日が最も利用率が高く、その利用目的は模擬授業（9月16日、18日、24日の順：23.5%、35.3%、10.3%）、打ち合わせ（27.9%、29.4%、0.0%）、教材づくり（8.8%、5.9%、2.9%）が主であり、黒板の利用（板書練習・計画）を挙げる実習生も2割程度（19.1%、22.1%、8.8%）と多かった。使用した実習生（32～71名）の学習支援に関する意見は附属学校園に対してはほぼ9割（ある：94.4%、88.7%、87.5%）の実習生がある程度満足しているが（先生・指導・助言（27.0%、32.0%、35.7%）、教材提供（25.4%、21.3%、21.4%）、放課後・場所・教室（17.5%、20.0%、28.6%）が7割程度）、大学に対しては6～8割の実習生（ない：81.9%、63.4%、57.5%）が開放教室数（46.8%、44.0%、15.6%）や時間帯（35.4%、21.3%、31.3%）について満足していなかった。なお、調査日3日目で、ネガティブな意見の割合が減っている理由は、実習の最後の週の前であるため、授業担当者の数が減っていることと、教室利用目的が子ども達へのプレゼントづくりのためであったことによる。なお、休日利用時間帯の回答割合は、幼稚園が81.3%、小学校が92.6%、中学校が69.4%であった。

以上より、占有して使用できる部屋の数が少ない小学校は、平日の大学開放教室数を増加（現行の5教室から11教室）することが望ましい。また、休日の教室開放は、実習開始の3週目までの休日の9～17時（最も利用が多い小学校のピーク値：それ以降は4割）まで等の検討が必要である。但し、実習生の心身の負担や近年の働き方改革を考慮する必要がある。

### 3.2 教育実習における知識・技能の活用状況

表5に主免実習のアンケート結果を示す。問6の①から③の設問に対する回答より、幼稚園の実習生は、指導案や教材づくりに対して実習前に大きな不安を抱えているが、実習後は園児の実態把握と同僚や教員との協議を重ね、早くから取り掛かることで、肯定的な意見へと大きく変化した。そして、小学校の実習生は、睡眠や食事に気を付けることで心身の準備に改善傾向が見られた。指導案については事前準備をしたが実習生が多く、不安を抱えた実習生は実習前が26名（19.1%）、実習後が15名（11.4%）と少ない。また、教材づくりに対しては、児童の実態を把握したうえで、同僚と共同して文カード、写真、パワーポイントなどを目的や流れを考えて作成することで、肯定的な意見へと大きく変化した。さらに、中学校の実習生は、実習前に指導案をかなり検討しており自信を持っているが、実際の授業では専門知識の不足による時間不足を感じてやや否定的な意見へと変化した。また教材づくりに対して実習前に大きな不安を抱えているが、実習後は生徒の実態把握と同僚や教員との協議を重ね、同僚と共同して文カード、

写真、パワーポイントなどを目的や流れを考えて作成することで、肯定的な意見へと大きく変化した。さらに、問6の④から⑱の結果より、全体的な傾向として、集団作り、課題研究に関する資料収集や授業の時間配分を苦手とする実習生が多く、中学校では指導計画・学習形態、思考を促す発問・質問、話し方・指名方法も苦手な実習生が多いことが分かる。これに対し、校種間では、事後の指導案の準備、子どもの実態に応じた工夫、適切な話し方や指名の仕方で校種が上がるほど低下し、目標と手立て、思考を促す発問、適切な時間配分、丁寧で分かりやすい板書で校種が上がるにつれて低下する傾向が見られた。

表 5. 主免実習のアンケート調査結果

質問項目	校種 Q 目実施時期	幼稚園				小学校				中学校				幼稚園	小学校	中学校	3校種間
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4				
		1,2と2,3を $\chi^2$ 検定															
5. 教職を希望するか	前	4	8	7	13	7	20	42	67	8	13	18	33	NS	NS	NS	NS
	後	1	7	10	13	8	15	30	80	6	17	12	37				
6. 実習前/実習中の準備/達成状況	前	0	5	18	9	7	29	80	19	0	14	40	18	NS	※	NS	NS
	後	0	3	13	15	5	14	62	52	1	11	25	35				
①心身の準備	前	21	7	3	0	2	24	89	21	1	4	50	17	※※	NS	※※	NS
	後	0	1	14	16	1	14	68	50	1	20	36	15				
②授業の準備(指導案)	前	15	10	6	0	39	64	30	3	7	38	21	6	※※	※※	※※	NS
	後	0	3	13	15	0	17	64	51	0	10	31	31				
③授業の準備(教材)	前	0	0	8	23	0	3	38	92	1	10	34	26				NS
	後	0	1	4	26	0	2	30	101	0	0	28	44				
④子どもとの積極的な関わり	後	0	0	16	15	0	1	54	78	1	2	42	27				NS
⑤謙虚な態度	後	0	0	22	9	0	6	64	63	0	5	43	24				NS
⑥子どもの言動の理解と共感	後	0	3	23	5	0	21	73	39	2	7	50	13				NS
⑦意図の共有	後	0	0	24	7	0	17	80	36	1	12	47	12				6.3680 ※
⑧日録作成	後	0	1	20	10	0	14	82	37	0	23	39	10				20.242 ※※
⑨目標と手だて	後	0	1	12	18	0	5	46	82	0	1	38	33				NS
⑩子どもの実態に応じた工夫	後	0	2	20	9	2	24	83	24	1	21	39	11				8.0295 ※
⑪授業や反省会	後	0	6	20	5	1	36	70	26	4	28	31	9				8.4962 ※
⑫思考を促す発問	後	0	0	24	7	1	20	80	32	2	21	33	16				13.373 ※※
⑬適切な話し方や指名の仕方	後	1	3	19	7	2	33	68	30	4	22	32	13				6.0285 ※
⑭丁寧でわかりやすい板書	後	1	8	20	2	0	40	69	24	0	22	32	18				NS
⑮クラス集団づくり	後	0	0	18	13	0	3	60	70	0	3	45	23				NS
⑯反省を生かした実践	後	1	13	16	1	6	49	62	14	1	26	33	11				NS
⑰課題研究に対する資料の収集	後	0	0	13	18	1	3	49	80	1	2	35	34				NS
⑱社会人としてのマナー	後	2	17	13	0	4	115	14	3	5	62	4	0	※※	※※	※※	NS
8. 教員としての資質	前	0	6	25	0	2	65	65	1	1	44	25	1	10.536	43.437	20.455	16.733 ※※
	後	1	17	12	1	16	89	27	0	17	39	14	2				6.5297 ※
9. 教員としての指導力	後		3		28		8		120		6		65				NS
10. 理解を深めたいこと	前	4	10	12	6	15	39	60	22	10	30	23	9	NS	※※	NS	NS
	後	0	10	17	3	9	23	64	35	10	18	26	17				
12. 学部授業の見直し	前	1	1	28		27	17	87		14	9	46		NS	※※	NS	NS
	後	1	2	26		17	8	104		13	6	48					
13. 教員、アドバイザーへの相談	前													NS	6.730	NS	NS
	後																

注) 検定は $\chi^2$ 検定で、※は5%有意水準、※※は1%有意水準を示す。

表6に、心身、指導案作り、教材づくりに対する、実習前と実習後の準備状況のイメージを示す。中学校

表 6. 実習前の志向領域に対する実習後の変化傾向

	心身の準備			指導案作り			教材作り		
	幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
元々ポジティブ領域で上昇	10	31	17	1	37	7	3	15	8
元々ポジティブ領域で低下	8	18	13	0	17	21	1	4	2
元々ネガティブ領域で上昇	4	27	12	27	18	3	22	92	36
元々ネガティブ領域で低下	0	2	0	0	1	0	0	1	0
元々ポジティブ領域で変化なし	8	50	27	2	56	38	2	14	17
元々ネガティブ領域で変化なし	1	8	3	0	7	3	2	10	9

の指導案作りでネガティブなイメージやイメージが低下傾向にある生徒の割合が36.1%と最も高く、他は概ね20%から30%の間にあることが分かる。

### 3.3 教員としての資質・能力や教職志望への影響

表7に教員志望率の実習前後での変化を示す。全体的には、実習前後で教職志望率は変化ないが、幼稚園と小学校では教職を志望する学生割合が教職を志望しない学生割合より高い。と

表7. 実習前後における教職志望率の変化

	幼稚園		小学校		中学校	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
望まない	37.5%	25.8%	19.9%	17.3%	29.2%	31.9%
望む	62.5%	74.2%	80.1%	82.7%	70.8%	68.1%
学生数	32	31	136	133	72	72

ここで、平成28年度卒業生の教職就職者数は小学校が70人(67.4%)、中学校が40人(61.5%)、幼稚園が3人(11.1%)、保育士を含めると22人(81.5%)、特別支援学校が9人(69.2%)、保育士を含めると10人(76.9%)

表8. 実習生の基礎・基本的知識・技能の習得感

	資質能力			教職意欲		
	幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
元々ポジティブ領域で上昇	0	0	0	0	22	8
元々ポジティブ領域で低下	1	7	1	1	11	12
元々ネガティブ領域で上昇	14	50	23	6	6	9
元々ネガティブ領域で低下	0	2	0	1	3	2
元々ポジティブ領域で変化なし	12	14	3	19	76	31
元々ネガティブ領域で変化なし	4	63	43	4	18	10

である。これらより、実習後に教員就職者は減っており、事後指導等によるキャリア教育支援が重要であることが分かる。

表8に、実習生の資質(教員の基礎・基本的知識・技能)の習得感を示す。表より、実習生は自身の教員としての資質能力に対してネガティブなイメージを持っており、その傾向は校種が上がるほど高い(15.6%、52.9%、61.1%)。主な記述は、教師としての技量不足、専門的な知識の不足、生徒指導(子ども理解)の困難さ、個人と・全体を見る力不足、コミュニケーション能力不足(言葉かけ)が、校種に関係なく同程度の割合で見受けられる。

### 3.4 教育実習を通じた省察と学部教育に対する評価

問9の教員の指導力については、全体的に実習生は低く評価する傾向があり、幼稚園はその傾向が若干弱かった。幼稚園の自由記述を見ると、言葉かけなどの指導に不安を感じている実習生もいるが、成功体験や先読みができるようになることで自信がついたと感じている実習生もいること、小学校のそれでは、多くの知識や視点を持つ必要があること、児童からの一言に励まされたなど、自分なりの課題や意義を感じている実習生がいること、また中学校のそれでは、生徒との関係性やコミュニケーションに課題を感じている実習生がいることから、実習生は、子ども理解や関係性に悩み、教科指導力に課題を感じていることが分かる。問10の実習を通して理解を深めたいことは、全体的に9割以上の実習生があると回答しており、幼稚園では24人(77.4%)の実習生が子ども理解・指導(友達関係、遊び、トラブル、男女差、言葉かけ、空間認知、主体性)や家庭環境(保護者対応、愛着形成)、安全管理・対応、インクルーシブル教育について、小学校では110人(85.9%)の実習生が子ども理解(心理、教師との関係性、ほめる・叱る、言葉かけ、理解力)、学級経営(雰囲気づくり、担任、個と全体)、授業

づくり・指導（発問、板書、導入、道徳教育、複式、給食、教科の知識、評価の公平性、ねらい、意欲・関心、ゆさぶりなど）、安全管理（メンタルヘルス）、保護者対応、インクルーシブル教育について、中学校では 59 人（83.1%）の実習生が子ども理解（心理、信頼関係、学年・学級）、指導（判断基準、生徒指導、役割、叱り方）、教科指導（専門性、発問、板書、意欲・関心、導入、構成力、めあて、ユニバーサルデザイン、ゆさぶりなど）、学級経営（掲示物）、安全管理（メンタルヘルス）について記述しており、幼稚園では遊びなどを通じた友達関係やその背景にある家庭環境に関連する内容、小学校は複数教科を指導することから生じる問題や学年に応じた指導の在り方に関連する内容、中学校は各教科の専門性や教科制に伴う多様な生徒集団への対応に関する内容を課題として挙げている点が特徴と言える。

教員・アドバイザーの利用は、幼稚園が実習前の 2 名から実習後には 3 名へ、小学校が 44 名から 25 名へ、中学校が 23 名から 19 名へ変化しており、実習前の不安が実習中の指導や教員、同僚、児童生徒との交流により軽減する傾向があることが分かる。しかしながら、48 名（20.0%）の実習生に具体的な心身の問題が生じていることを考えると、日常的な学生指導やコミュニケーションスキルの向上等の対策が必要と言える。

問 12 の学部授業の見直しについては、幼稚園が 18 名から 20 名、小学校が 82 名から 99 名、中学校が 32 名から 43 名に増加している。その主な理由は、幼稚園では実践的な内容（実習前は参観の機会の増加、大学の学びの現場での活かし方、指導案の書き方指導）の充実、小学校では実践的な内容（実習前は指導案・TP 案、模擬授業）の充実（実習前は保護者対応、具体的な指導方法、指導案・TP 案、模擬授業）、中学校では教職全体の業務内容、指導案の書き方指導、より実践的な授業（実習前は模擬授業の充実、理論と実践の往還、実践力向上）が挙げられた。学部の授業に対する肯定的な意見も見受けられたが、より理論と実践の往還を意識したカリキュラムへの体系化を図り、個々の講義・実験・実習が教員養成の目的に即した内容に変わって行くことが求められる。

### 3.5 副免実習に対する実習生の意識の変化と意見

表 9 に、副免実習のアンケート調査結果を示す。問 6 の①から③の設問に対する回答より、全体的な傾向は主免実習と同じである。その中で、幼稚園の実習生は、ピアノの練習（主免実習 2 名、副免実習 9 名が記述）やインターネット等を活用した手遊びや遊び道具作り等の準備を早くから始めることで、肯定的な意見が増加している。また、特別支援学校は、6 月と 10 月に実施され傾向はほぼ同じであったが、6 月の方が指導案や教材の準備について具体的な記述が多かった（6 月は指導案 13 名、教材 9 名で、参加観察実習の記録や講義資料や授業アーカイブシステム（過去の教育実習の授業のビデオや指導案のデータベース）による検討、授業参観、先輩からの実習内容の聴取に対し、10 月は指導案 3 名、教材 1 名で、実習の手引きによる指導案の確認、ICT 機器の学習、授業参観）。これは、

表 9. 副免実習のアンケート調査結果

質問項目	校種	Q 評価項目実施時期																1,2と2,3を $\chi^2$ 検定					$\chi^2$ 検定				
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4		
5. 教職を希望するか	前	0	1	11	14	0	3	3	13	1	11	22	34	4	6	8	15	0	2	7	21	NS	NS	NS	NS	NS	7.882 ※
	後	0	0	10	16	0	2	4	13	2	9	23	34	2	8	6	17	1	1	10	17						13.720 ※※
6. 実習前/実習中の準備状況 ①心身の準備	前	0	2	12	12	0	0	13	6	2	14	41	11	1	2	25	5	1	4	20	5	NS	NS	NS	NS	NS	11.856 ※※
	後	0	7	7	12	0	1	8	10	4	15	31	18	1	5	18	9	0	5	13	11						NS
②授業の準備 (指導案)	前	12	8	3	0	0	1	11	7	0	7	47	14	18	12	3	0	18	12	0	0	※※	※※	※※	※※	※※	90.891 ※※
	後	0	7	7	12	0	1	8	10	4	15	31	18	1	5	18	9	2	1	12	14	17.779	NS	6.848	35.200	48.088	NS
③授業の準備 (教材)	前	5	7	8	2	5	7	7	0	13	26	25	4	20	11	2	0	21	9	0	0	※※	※※	※※	※※	※※	15.140 ※※
	後	0	0	12	13	0	1	6	12	2	10	48	8	2	6	13	12	2	4	8	15	18.312	14.15	22.871	33.157	38.994	12.187 ※※
8. 教員としての資質	前	0	21	4	1	0	17	2	0	5	56	6	1	1	27	5	0	1	27	1	1	※※	※※	※※	※※	※※	NS
	後	0	7	16	3	0	3	14	2	0	32	34	2	0	14	18	1	0	19	10	0	15.167	20.69	28.601	NS		7.042
9. 教員としての指導力	前	2	15	9	0	3	9	6	1	15	43	10	0	7	18	8	0	5	15	7	1						NS
	後	1	1	25	2	17	2	13	5	5	3	30	3	3	24	0	1	27									NS
10. 理解を深めたいこと	後	1	1	25	2	17	2	13	5	5	3	30	3	3	24	0	1	27									NS
11. 附属学校からの指導への満足	後	0	0	7	19	0	0	6	13	1	17	17	33														20.502 ※※
12. 学部授業の見直し	前	7	5	13	1	2	7	9	1	8	28	25	7	3	15	12	3	6	10	11	3	NS	NS	NS	※	NS	NS
	後	10	6	9	1	4	4	7	4	7	21	23	17	1	7	19	4	7	6	11	5				5.473		NS
13. 教員、アドバイザーへの相談	前	7	0	18						16	9	43		4	4	25		2	1	27							NS
	後													3	3	24		0	1	27					NS	NS	NS

注) 検定は $\chi^2$ 検定で、※は5%有意水準、※※は1%有意水準を示す。

10月実習が、主免実習終了から2週間後に始まるため、時間的な余裕が少なかったためと考えられる。校種間で比較すると、中学校の実習生は心身の準備に不安を抱えている実習生が多く、幼稚園と特別支援学校の実習生が指導案の準備に対する不安感が大きい。教材については、各校種の前後で大きく改善する傾向が見られるが、その変化の要因は校種の特性に大きく依存していることが分かった。

表 10 に、実習前後における教員志望率の変化を示す。全体的には、実習前後で教職志望率に大きな変化はないが、特別支援学校を除いて、実習後の教職志望率の方が高かった。

表 10. 実習前後における教職志望率の変化

	幼稚園		小学校		中学校		特別支援学校	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
望まない	3.8%	0.0%	15.8%	10.5%	17.6%	16.2%	19.0%	19.4%
望む	96.2%	100.0%	84.2%	89.5%	82.4%	83.8%	81.0%	80.6%
学生数	26	26	19	19	68	68	63	62

なお、平成28年度卒業生の副免校種の教職就職者数は、幼稚園が1人(3.7%)、小学校が9人(7.7%)、中学校が6人(9.2%)、特別支援学校が3人(23.1%)である。

問9の教員としての資質については主免実習と同様の傾向を示しているが、資質を身につけるには期間が短すぎると感じている。特別支援学校の自由記述によると、基礎免実習後の10月の副免実習においても、できると思っていたことができない、子どもの実態に合った指導の難しさなど特別支援学校ならではの指導の難しさを改めて感じ、資質がないと感じる実習生が75%程度(6月実習75.6%、10月実習71.4%、幼稚園・副免65.4%、主免59.4%、小学校副免63.2%、主免87.5%、中学校副免85.3%、主免94.4%)と高かった。

問10の実習を通して理解を深めたいことは、幼稚園では25人(78.1%)の実習生が子ども理解・指導や家庭環境、安全管理・対応、インクルーシブル教育について、小学校では17人(12.5%)の実習生が学級経営、授業展開(発問、班活動、意見の取り扱い方など)、インクルーシブル教育について、中学校では55人(76.4%)の実習生が子ども理解(ほめる、叱る、距離感、声掛けなど)、教科指導(専門性、発問、板書など)、学級経営について、特別支援学校(6月)



は 30 人 (90.9%) の実習生が習慣づけ、子ども理解 (距離感)、話し方、ST の方法、授業内容や教材の使い方、学級経営について、と回答しており、幼稚園、中学校、特別支援学校では子ども理解や指導上の課題を明確に挙げる実習生が多いことが分かる。

教員・アドバイザーの利用 (利用意思務含む) は、幼稚園 7 名 (26.9%、主免実習 2 名・6.1%)、小学校 10 名 (52.6%、主免実習 25 名・18.4%)、中学校 25 名 (36.8%、主免実習 19 名・26.4%)、特別支援学校 7 名 (6 月 6 名・25.0%、10 月 1 名・3.7%、計 13.7%) であり、主免実習に比べ副免実習の方が高いことが分かる。

問 12 の学部授業の見直しについては、幼稚園が 14 名から 10 名に減少し、小学校が 10 名から 11 名、中学校が 32 名から 40 名、6 月の特別支援学校が 15 名から 23 名、10 月の特別支援学校が 14 名から 16 名に増加している。その主な理由は、幼稚園では実践的な内容 (実践的な (子どもとかかわり、授業参観など) 授業の充実、指導案の書き方指導) の充実、小学校では実践的な内容 (指導案・TP 案、模擬授業、具体的な指導方法) の充実、中学校では教育現場の実態を知る機会 (授業参観含む) の充実、実践的な内容 (指導案、模擬授業、具体的な指導方法: 教科書を含む、授業構成) の充実、特別支援学校では事前準備への指導の充実、実践的な内容 (指導案、授業参観、模擬授業、合理的配慮に関する学習、教材) の充実、事前に子ども達と触れ合う機会 (学習面だけでなく生活面についても知りたい) の充実、講義の重複や集中講義などの時間割や実習時期が挙げられており、主免実習と同様の傾向であった。

#### 4. まとめ

本研究では、本学部教員養成課程の 3 年生を対象に実施したアンケート調査を分析し、以下のことが分かった。

1. 実習生は、実習前に指導案や教材について大きな不安を抱えているが、実習中の子どもの実態把握、教員からの指導や同僚との学び合いなどを通じ肯定的な意見に変化する傾向が高いことが分かった。また、集団作り、課題研究に関する資料収集や授業の時間配分を苦手とする実習生が多く、校種によらず、子ども理解、学級経営、授業づくりや指導面で不安を感じている。
2. 学部教育と教育実習の関係性について、実習生は事前指導については概ね高評価であったが、実習前に園児・児童生徒の 1 日の生活リズムや実態を把握するために子ども達と触れ合う機会や参観する機会を増やしてほしいという希望を持つ者が多い。一方で、大学の講義については、指導案の書き方、模擬授業の充実、板書も含む指導方法の充実を求めており、大学で学ぶ理論を実践に活かすための方法や考え方を学びたいと考えている。
3. 教育実習と教員志望の関係性について、実習終了後の教職志望率と前年度の教員採用率を比較すると、小学校が 14.9%、中学校が 6.6%の差があり、実習

後に教員志望率が低下することが窺え、実習前後では逆に高まる傾向が見られることから、教育実習の効果やその成果を学部教育で活かし、高める方策が求められる。なお、副免実習の受講者は、校種が上がるほど教員就職率が高かったが、幼稚園は幼稚園のこども園化もあり、保育園を含めた就職が高い。

4. 教育実習に関する支援制度の在り方について、コースに所属する学生数に比べて、占有して使用できる部屋の数が少ない小学校は、平日の大学開放教室数を増加（現行の 5 教室から 11 教室）することが望ましい。また、休日の利用については、実習開始の 3 週目までの休日のいずれかを 9～17 時（最も利用が多い小学校のピーク値：それ以降は 4 割）まで開放することも検討の余地がある。但し、実習生の心身の負担や近年の働き方改革を考えると、慎重に検討することが必要である。

今後は、特別支援学校の主免実習の調査も行い、学部教育と教育実習の指導や支援の改善を図り、その効果を検討したい。

## 謝辞

本調査を行うにあたり、教育学部実習委員会及び附属学校園の協力を得た。

## 参考文献

- (1) 新潟大学教育学部附属教育実践研究指導センター、教育実習調査委員会、「国立教員養成大学・学部における教育実習制度の調査研究」、『教育実践研究指導センター研究紀要』、3、pp.7-49、(1984).
- (2) 上地完治・他 5 名、「学部教員養成教育と教育実習の接続に関する質的研究」、『琉球大学教育学部紀要』、73、pp.115-133、(2008).
- (3) 中央教育審議会、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm)、文部科学省、(2006：参照 2018.1.12).
- (4) 中央教育審議会、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」、文部科学省、(2012).
- (5) 沖塩有希子、「教員養成教育のあり方に関する一考察：教員の資質能力向上に関する中央教育審議会答申を手がかりとして」、『千葉商大紀要』、51(1)、pp.55-71、(2013).